

遊狂の花

馬場あき子

遊狂の花

馬場あき子

大和書房



馬場あき子（ばばあきこ）

1928年 東京に生まれる
昭和女子大卒業

現 在 現代歌人協会員
歌誌「まひる野」同人

著 書 歌集「早笛」「地下にともる灯」
「無限花序」「飛花抄」（新星書房）
「式子内親王」（紀伊國屋新書）
「鬼の研究」（三一書房）
「大姫考」（大和書房）

遊狂の花

一九七四年三月一日初版発行

著 者 馬場あき子

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三 郵便番号 一一二

電話 二〇三・四五一一

振替東京六四二二七

印刷 信毎書籍印刷

製本 ナショナル製本

装幀 中島かほる

1339-990340-4406

©1974 Akiko Baba

〈検印略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

何せうぞくすんで 一期は夢よただ狂へ

遊狂の花
目次

I 章

命は惜しいものにて候ひけり……………九

戦記物の中の死

盗賊論……………一八

山姥の暗黒……………二六

鬼の復権……………三六

鬼様のもの人に見ゆべきにあらず……………四三

説話的現実の中の越境

II 章

醒めたる狂気の極……………五五

中世の遊狂精神にふれて

瘦と婆娑羅……………六九

中世を止揚した美の思想

中世日本人の風景観……………八六

身にしむ色とよその夕暮……………一九九

詩語へよそゝの変貌……………一二三

和歌的狀況の中の疎外意識

Ⅲ 章

反骨の花……………一二九

正徹の詩論

兼好における超越……………一三八

芭蕉連句の相生と相剋……………一四九

秋の〈怨〉と〈殺〉……………一六三

上田秋成「吉備津の釜」

Ⅳ 章

黒緋くろひ、または女的情念について……………一七七

扇……………一八五

櫛……………一八九

よそゆきことば……………一九三

間の表情……………一九九

青葉の黒川能……………二〇三

住吉詣……………二一五

あとがき……………二一九

I 章

命は惜しいものにて候ひけり

戦記物中の死

ある日、『平家物語』の中で〈犬死〉ということばに出合つて、このことばが意外に古くから使われていたのに驚いた。保元・平治の物語にはたしか使われてはなかったように思う。「犬羊の類」ということばは、ごくつまらぬもののたとえに用いられていたから、犬死の〈犬〉も、ごくつまらぬ死に方のたとえにちがいはないが、とすると、その「ごくつまらぬ死」とはどういう死に方をさすのだろうか。

後年、主従の情誼に、従のがわからの一方的献身が要求されるような道德が、いわゆる侍の道として教育されるようになって、犬死は専ら従のがわにのみ発生する状態が生まれた。しかし、少なくとも戦記文学の時代の犬死には、そうした犬死はない。『平家物語』に犬死の語がみえるのは「河原合戦」の場で、木曾義仲が六条高倉の女房と別れを惜しんで出陣の時刻が延びている時に使われ

ている。新参者ながら越後の中太家光^{ちゅうたけみつ}という者が、義仲が犬死するであろうことを愁えて腹を切るのであるが、結果的に義仲は六条河原で何時間か後に大敗してしまう。むしろかえって、越後の中太こそ犬死のような印象さえのこるが、『平家物語』は「木曾、是は我を進むる自害にこそ、とて臆^{おそ}て打っ立ち給ひけり」と、中太家光の死甲斐をみとめているようである。

また、このような話もある。法住寺合戦で木曾勢を防ぐため、法住寺西門を守備していた後白河院方の侍源藏人仲兼は、最愛の郎等信濃次郎を従えていたが、次郎は主人の馬が無人のまま走っているのを見て、その討死を錯覚し、「二所^{ふたところ}でいかにもならんと日来^{ひごろ}はさしも契りしものを、所所に臥さん事こそ悲しけれ」と、敵勢の中へ駆け入り大奮戦のはて討死してしまう。一方主人の方は、そんなこととは露しらず、兄もろとも河内国へ落ち延びてしまうのである。郎等はぜひ分壮烈な犬死をしてしまったわけだが、『平家物語』はこれも決して犬死としてかいているわけではなく、むしろ次郎の志のやさしさに感動してかいているのである。

例をあげれば限りがないが、つまり、少なくとも戦記文学の世界において、犬死とは、決して主従の規範に従属するものではなく、個人の名誉にかかわるものであった。一の谷の合戦で、熊谷直実と平山季重が先陣を争ったことがあった。平山は成田五郎にたばかられて熊谷に先を越されるが、その成田五郎が平山を説得したことはには、当時の武者の合戦での態度がくっきりと出ていておもしろい。「軍^{いくさ}の先をかくると云ふは、御方^{みかた}の勢を後に置いて、先をかけたればこそ、高名不覚も人に知らるれ。ただ一騎敵の中にかけ入って、討たれたらんずるは何の詮にかあふべき」つまり素朴

な言い方をすれば、腕の強さを多くの人々の前で示すことが、生涯の面目であって、それはまた「死」においても同じことなのである。したがって木曾義仲が敗戦の中に「同じう死ぬとも、好き敵にありて、大勢の中にこそ討死をもせめ」という花々しい戦死を希うのも、後世への語りぐさとなる武名のため、ぜひ必要な最後のみせ場を求めたのであった。話を戻せば、義仲が犬死するのではないかと心配した越後の中太の愁えとは、こうした花々しい場面を作り出す時間が小刻みに浸蝕されてゆくのを、義仲のために座視できなかったということになる。

それにしても、戦記文学がこうした武名に賭けた男たちを描きながら、ふしぎに深い抒情性をたたえているのは、これらの武者たちの人情に対する血の熱さによるものではなからうか。時代はずっと下るが、『徒然草』の百四十二段には、見るもおそろしげな武者が、子供がないという男に向って、「さては物のあはれは知り給はじ、情なき御心にぞものし給ふらんといとおそろし。子故にこそよろづのあはれは思ひしらるれ」と語る所がある。武者は、合戦という死に隣接した日常の中で、いっそう親子兄弟の頼もしさやいとしさを痛感することが多かったにちがいないが、それは単に血の通う仲というだけでなく、具体的に武名を共有しあい、誇りを頒ちあえる最も親しい仲間であつたのである。

とはいえ、そうした親しい血縁は、負け戦の時ともなればそれだけにいっそう苦しい連帯感につながれるを得ず、武者として以上に人間としての苦渋がよびさまされるものである。私はそうした合戦の場の苦境に立った親子の姿に、極限に置かれた生の哀しさと、それを超えたときの死の安

らかさを見る。

『平治物語』の待賢門の合戦に、平頼盛の侍に兵藤内家俊ひょうとううちけという大臆病人おびょうどうじんがあった。人の後から、なるべく傷を負わぬよう駆けあるいて戦いのまねごとをしているうち、馬を射られ、とある小家に逃げこんでいると、父に似ぬ大剛の子息、太郎家能いえよしは、父の馬がたおれているのを見て討死したものと思いこみ、人目を驚かす大奮戦をはじめ。弔い合戦のつもりなのである。父は、はらはらしながら家の中からのぞき見てはいたが、怖しくてついに出来る事ができず、子供は目の前で見事な討死をとげてしまう。しかしこの臆病さは余程であつたらしく、子供の死骸を担いで帰ることもできなかった。家俊は親子の情さえ守れなかった男として仲間から爪弾きされたということである。

このような場合、ふつうはどうあるべきなのであろう。同じ時刻のころ、六条河原では別の小ぜりあいが行なわれていた。悪源太義平が源頼政のにえきらぬ態度に業をにやして、同士討ちに出たのである。その時、義平の郎等須藤俊綱は頼政がわの放つ矢に当って若い命を落してしまつたが、この時、父須藤刑部は、「命捨てて軍をするは、滝口（俊綱のこと）を世にあらせんためなり。今は生きて何かせん。うち死せん」と駆け出そうとしたが、義平は「あたら刑部討たすな」と部下に命じて引き止めさせている。このような例、つまり、親子兄弟の誰かが討死した時は、その場を去らず枕をならべて討死するとしても、その仇をとりたいたいと考えるのが、合戦の場の人情として一般的には通っていたのであろう。一の谷で梶原平三が困難な連続二度の交戦を敢えて挑んだのも、嫡男源太の討死が予測されたからであつた。「戦の先を懸いけんと思ふも子供が為、源太討たせて景時

残り留まっても何かはせん」というのがその理由で、まったく須藤刑部の場合と同じである。

しかし、いつもいつもそうであるとは限らない。平家の侍、妹尾兼康は、木曾方に生捕られながら、たばかってついに領国に帰り叛旗をひるがえした剛の者であるが、今井四郎を先鋒とする軍の追いつちにあい、応援に出迎えた子息ともども大敗を喫する。ところが妹尾の嫡子小太郎宗康は大兵肥満で敗走にはまことに不向きであった。百メートルと走れないのである。父は一旦子供を見捨て、二キロ近くは走ったが、ついに郎等に向かつて、「兼康は日ごろ千万の敵にあうて戦するは、四方晴れて覚ゆるが、今日は小太郎を捨てて行けばにや、一向先が暗うて見えぬぞ」と告白する。そして郎等に「さ候へばこそ、ただ御一所でいかにもならせ給へと申しつるはここ候ぞかし。返させ給へ」と諫められて引返すのである。親子は再会し感動の涙を流すとともに、心も安らぎ、逃走を諦めて討死を覚悟する。今井の軍が迫ってきたとき、妹尾はまず子供の首を討ち落し、それから心ゆくまで戦って討死したのであった。

そして私は、最後に平知盛の有名な述懐を思い出さないわけにはいかない。一の谷の合戦は熾烈をきわめ、平氏は一族十人を討死させたが、その中に武蔵守知章ともあきらもあった。知章は知盛の嫡男で十六歳の少年であったが、生田の森の合戦で父と、侍の監物太郎けんものと三騎に打ちなされ、沖の兵船を望んで佇んでいる所に源氏の一団が襲いかかった。知章は父を討たせまいと夢中で敵と組んで討死し、監物太郎もまた知章の怨みを晴らそうと戦ううち渚に射たおされてしまった。父の知盛はただ一騎、そのひまに逃げのびて沖の兵船にたどりついた。平知盛は清盛の末弟で、沈勇をもつてきこえた猛

将である。知盛はその後、宗盛の前で涙を流して次のように語った。「武蔵守にも後れ候ひぬ。監物太郎も討たせ候ひぬ。今は心細うこそ罷りなりて候へ。いかなれば子はあつて親をうたせじと、敵に組むをみながら、いかなる親なれば、子の討たるを助けずして、是までは通れ参つて候やらん。人の上でだに候はば、いかばかりもどかしう候ふべきに、我が身の上になり候へば、よう命は惜しい物にて候ひけりと、今こそ思ひしられて候へ。人々の思しめさん御心の内ども慚しう候へ」子供を身代りに殺されても、なお命は惜しいものだということを、人前で告白したこの場面には、あの兵藤内家俊の臆病の場面とは比べものにならない厳然たる、肅たる美しさ、哀しさがにじんでいる。それは知盛が臆病ではなかったからなどという単純なことではない何かの作用がわれわれの心を射すくめるのだ。このようなおそろしいまでの告白を、人前でできた知盛という武將は、よほどすぐれた鋭い人間観をもって、人間の「あはれ」のもう一つむこうにあるものを、たしかに見ぬいていたような気がする。

しかしながら、武者とは、ふしぎに生きのこることはあつたとしても、まちがっても死にのこつてはいけなもののなのである。生きのこると、死にのこるは、微妙な点で近似しながらちがうのである。前者は復権・報復の可能性を身に残す場合であり、後者はその見通しがなり立たない場合であるといえようか。死にのこるということは、武者の面目をあらわさずに死ぬ、かの犬死以上にみっともないことではあるが、しかし、それはあくまで武者の倫理としてではなく、もっと一般的な人情に根ざす羞恥の感に発するものであつた。